

## 趣旨説明

### (公財)日本生態系協会 会長 池谷奉文



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました池谷でございます。本日は大変お忙しいなかを多数おいでいただきまして、ありがとうございます。

昨日、韓国の順天からおいでになりました市長さんと親しく懇談の場をいただきました。少し前にドイツの方から、「最近の国際情勢を見ていると、中国・韓国が自然再生に力を入れていて、日本はそれに一步遅れをとったのではないか」という話がありました。ああそうなのかと思って中国へ行ってまいりました。そうしたら、中国が凄い勢いで自然再生をやっておりました。この5年間で1250万haという膨大な面積で木を植えています。韓国でも同様に大変な勢いで自然の回復を行っていました。

そういうなかで、順天市の市長さんのお話を聞きまして大変びっくりいたしました。「20世紀は工業の時代だった。しかし、それは多くの資源を消費し、多くのゴミを出して、決して持続可能なものではなかった。21世紀は自然と生態系を利用して経済を活性化させ生きていく時代だ」とおっしゃったのです。すごいなと思いました。そこまで言い切れる市長さんは、日本ではまだ少ないのではないだろうかと思いました。

順天市長さんからいただいたお土産をご覧ください。順天市はムツゴロウやツルが健全に生きていける環

境を維持したい。こうした生きものが順天市の大元となっているのだし、それらを持続的に生かしながら発展していく、それが順天市だ」ということでした。このムツゴロウはそれを象徴するものです。順天湾の干潟に住んでいるムツゴロウを大切に思い、それで記念品を作る。ムツゴロウを大切にしているという心根がよく伝わってきます。大変素晴らしいと思いましたし、心から感動いたしました。

そういうなかで、日本はどうかということでありませぬ。地球ができて45億年以上になります。約28億年前、地球上に生命が誕生したころの夜明けの様子はこのような感じだったのではないかと思います(図-1)。ごろごろとした石のようなものがありますが、石ではありません。ストロマトライト、生物です。酸素を作っているのです。泡が見えますが、あれは

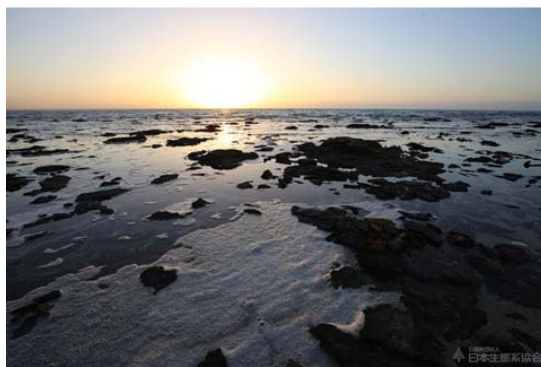


図-1

酸素の泡です。今のこの21%の酸素の源です。まさしく今の地球上の自然生態系を生んだ大元です。

しかし、その地球を、大量生産、大量消費、大量廃棄などによって、人類が大分痛めてしまいました。大量生産が始まったのがつい100年程前です。ストロマトライトが酸素の供給を始めてから約28億年経っていますが、たった100年の間に、地球温暖化という異常な状態にしてしまったということです。当然、大水が出る、強風が吹く、台風が巨大化するなど、いろいろな問題が起こってくるわけです。このままのかたちで文明を続けるということは大変難しい。そういう時代を我々は今迎えているわけです。

日本の現状を見てみましょう。まず山です。日本の国土の67%は森林です。しかし中身を見ますと、健全な自然生態系を保っているところは非常に少なく、十数%しかありません。ほとんどがこういった人工林であります(図-2)。スギ・ヒノキの単純林で、生物多様性がほとんどない状態です。それどころか、ここに雨が降りますと、膨大な土壌が流れていきます。過去の例を見ますと、土壌を失った国は滅びるといふ結末が待っています。そういったことが、現在日本でも起こりつつある、これが日本の山の現状です。

平地へ行きますと田んぼがあります。我々の食

料を作ってもらおう大変ありがたいものでございまして、これからもずっと頑張ってもらいたいと思っています。しかし、最近では、FTAとか、EPA、TPPという経済の自由化の流れの中で、大きく縮小しそうだという話があるわけです。しかし、経済の自由化やTPPということ、持続可能な社会というスケールで見たとき、本当に自由化の方向がよいのかどうか、私はさらなる議論の必要性があるだろうと思っています。しかし、今現実としては、その方向で行くことになっております。現在でも日本の農地は約40万haが使われずにいるわけです。それをどうするのか。私はやはり、使わなくなった農地は自然に戻すということが必要だと思っていますし、そうした議論が必要だと考えています。

次はまちでございまして。これを見た限り、少なくとも健全な生活ができるまちづくりだとは思えないのであります(図-3)。人間という一種類がゴチャッと住んでいる。これでよいとは思えないのです。このことは、とくに子どもたちに大きく影響します。将来を担う子どもたちをこういう環境で育てることは、決して良いことではありません。我々大人にとっては利便性が高くて良いということになるのですが、持続可能な社会という観点からすると、やはり、議論が必要だと感じるわけです。

まちの中を見ますと、自然をつなぐ役目を果た



図-2



図-3

す川はこういう状況になっています(図-4)。これでは生きものがいなくて寂しいということで、こういうものを置こうということになります。これが日本の川の現状です。日本には109の一級河川があります、そのうち108の河川にダムがあります。もちろんダムを造っていただくと、洪水が防げるし、いつだって水が飲めるし、農業用水も確保できる。必要なもの、大変ありがたいものではありません。我々現代世代にとってはありがたいものですが、将来世代にとってはどうでしょう。造ったものは全て老朽化していくという法則があり、こうしたダムもいずれ老朽化していきます(図-5)。古くなったダムを将来どうしていくのでしょうか。しかも、ダムを造ることによって川が堰き止められますから、環境にかなり大



図-4



図-5

きな負担がかかっています。自然生態系は今後大変重要になってきます。ダムと自然生態系をどう調和させるのか、きちんと話しあっていく必要があると思います。

道路も全く同じであります。道路ができることによって流通が改善されます。より豊かな生活ができるので、私たちの生活にとっては良いということになります。しかし、持続可能な社会という観点からすると、こうした道路もやがては老朽化していきます(図-6)。それどころか、石油、石炭という資源も有限で、これからは枯渇していくという時代を迎えます。

数年前、ドイツの大手の自動車メーカーを訪問した際、経営者に、これからの自動車産業をどうご覧になりますかとうかがいました。その答えとして、「自動車産業は、ハイブリッドや電気自動車に移行する時代を迎えています。しかし、それは長くは続かないと思います。近い将来、我々の仕事はなくなると覚悟しています」と言いました。自動車メーカーの方の発言です。すごいことだと思いませんか?今後こうしたことを踏まえて、日本の道路はどうするのかを考えていく必要があります。

持続可能な社会を築くためには、やはり人間の生存基盤である自然生態系をきちんと守ることが第一なのです。健全な生態系、つまり、タカ



図-6

やフクロウとか、タンチョウヅルやハクチョウ、山にはイヌワシですとか、そういった大型の鳥たちが住んでいる環境を保障する、守る、または取り戻すということが第一の公共投資なのです(図-7)。それをやらないと持続可能な国は構築できない。そうした野生の生きものたちが暮らせる自然環境を残してつないでいくこと、これがエコロジカルネットワークです。これからは都市計画、地域計画の根幹に据えるべき原則であります。ヨーロッパでは、各都市がこういった自然を塊で残してつないでいくのだということを、計画図などにして市民に明確に示しながら、まちづくりをしています(図-8)。日本でも全国の市町村で、こういった図を持つ必要があるだろうと思います。

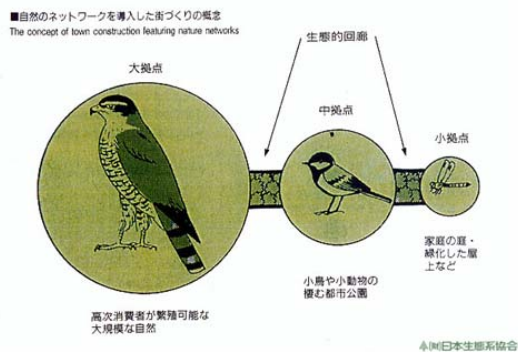


図-7

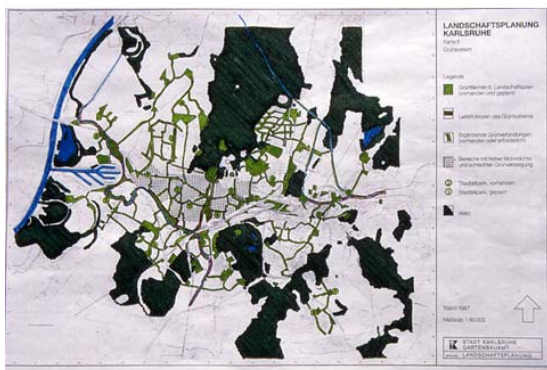


図-8

そうした流れのなかで、日本もやっと自然再生に動き出しました。豊岡で、また千葉で、コウノトリが大空を舞う時代を迎えました(図-9)。そして、佐渡の空を飛ぶ大変美しいトキが、やがて日本全国に広がっていくのだろうと思います。昔は国内様々なところにいたコウノトリやトキが、また全国に広がっていくという期待が高まります。生態系の頂点にいるコウノトリやトキを守ることが、国づくりの重要な土台になるわけです。

ここでひとつだけ注意しなければならないのは、単に自然再生だけをやればよいということではありません。重要なもう一つの要素があります。それは美しさです。単なる竹林では十分美しくないですが、ちょっと手を加えるだけで大変美しくなって、多くの人を訪れるようになります。これが経済活性化の大本です。21世紀は、持続可能な国のベースとなる自然と文化が共存する美しいまちをどう発展させていくかということになると考えます。これからの日本には是非そう変わってほしいと願っています。

本日のシンポジウムは、そうしたことを皆様と共に考えたいと思います。このムツゴロウさんに感謝をしながら、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。



図-9